
Dreaming Baby

月原 智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D r e a m i n g B a b y

【Nコード】

N 6 2 4 2 B

【作者名】

月原 智

【あらすじ】

「全ての運命が自分の手の中だと知ったとき、人はどうするのかしら…」あるとき彼女が言っていたこの一言を、なぜかふと思い出した。あの時俺は何て答えたんだろう…。いくら考えても、その時がくるまで俺は思い出せなかったんだ。

第1章・第1話・第2話

「朝よ。起きなさい！」

その日も俺はいつものように、母さんの呼ぶ声で目を覚ました。まだ開ききらない目をこすりながら洗面台へと向かった。

歯みがきをしながら髪をいじるためのワックスにも手を伸ばす。

「あれっ？」

いつも置いてあるはずのワックスがその日に限って置いてない。とりあえず歯みがきだけを済ませてリビングへと足を運んだ。

「母さん。俺のワックス知らねえ？」

俺の声に、料理をしていた母さんの手がピタツと止まった。

「あつあれね。中身が空っぽだったから、捨てといたわ。」

しどろもどろな声。

何をそんなに慌ててるんだろう。

「無いものは無いんだから、ぐだぐだ言っていないで早く学校に行きなさい。」

「でも、朝食…」

そう言いかけた言葉は、母さんの次の言葉に遮られて消えた。俺はしぶしぶカバンを持って家を出た。

「何だったんだろう…。今日の母さん、めっちゃ変やった。」

独り言を言いながら自転車を取りにガレージへと向かった。

その次の瞬間だった。

とてつもなく大きな騒音とともに、家が瓦礫の山となった。

突然の出来事に唖然とする俺。

「そうだ！母さんが中に…」

俺は必死に瓦礫をかきわけた。

幸いリビングは玄関近くにあったので、母さんらしきモノはすぐに見つかった。

周辺の瓦礫を急いで片付ける。

五分もしないうちに母さんにたどり着いた。抱き上げて意識を確認する。

「母さん！母さん！！どういう事だよ！」

俺の声に母さんの目がうつすらと開いた。

「良かった…。助かったのね…。」

咳をするたびに母さんの口から血が流れる。

「今、救急車よぶから！」

そう言つて、俺はケータイに手を伸ばした。けれど、その手は母さんの手によって止められてしまった。

「救急車を呼んでも、彼らがくるだけ…。私はもう助からない。いい？今から言う事をよく聞きなさい。」

本当に母さんは助からない。

なんとなくだけど、感覚的に悟った。

俺は静かに母さんの声に耳をかたむけることにした。

「すぐに大切なものだけ持ってココから逃げなさい。そして、隣町のおじさんの所に向かいなさい。ただし、その道中に会う人には注意して。おじさん以外、誰も信じちゃ…。だめ…。」

言葉とともに、血も流れていく。

「…友達にも、気をゆるしちゃだめよ…。」

母さんの声が、だんだん小さくなつていく。

「あなただけは…彼ら…から…逃げ…て。」

そう言い終わると、母さんの体から力が抜けた。

「母さん？彼らつて誰だよ。何で逃げなきゃ行けないんだ！」

動かなくなつた母さんの体を、俺は必死にゆらした。

当然そんなことをしても、死んだ人間は動かない。

俺は覚悟を決めて、手を離れた。

第1章・第3話・第4話

感覚だけで自分の部屋があつたであろう所にたどりついた。適当に物をどけていくと、大切にしていたカバンが見つかった。

「よかつた。ほとんどこわれてない。」

俺は革でできたそのカバンを拾い上げた。

カバンの中身はサイフとお菓子が少し。

「これだけあれば、大丈夫だろう。」

カバンを肩にかけて出かけようとしたその時だった。

『大切なものを全部持つて…』

どこからともなく声がした。

少女のようなすんだ声だった。

けれど辺りを見回しても、誰もいない。

言葉だけが妙に心に引つかった。

「大切なもの…?」

サイフ、お菓子、ケータイと、今手に持っている物を確認していく。

「これ以外に大切なもの? 大切なものって何だよ!!」

叫んで脳がスッキリしたのか、あるものを思いついた。

机だったものの引き出しを強引に開ける。

中から出てきたのは、ライターと花火だった。

それらをカバンにつめこむ。

「何があるかわからないからな…。」

少し大きめのカバンには、まだまだ物が入りそうなスペースがある。

「あとは何を入れよう…。」

独り言を言いながら、次々に物をつめこんでいく。

ティッシュにハンカチ、タオルに水筒。そして、着替え…。

「まるで遠足か旅行だな。」

最後に非常用のロープとナイフを入れてカバンを閉めた。

―チャリン―

立ち上がった俺のポケットで、家の鍵が鳴いた。
俺は玄関だった所まで軽やかに歩いていった。

一番歩きやすい靴に履き替えて、もう一度立ち上がる。
もう二度とここには帰れない。

脳が、体が、心がそう言っていた。

ポケットの鍵を空に投げた。

「バイバイ。」

鍵が落ちた音と共に、俺は歩きはじめた。
振り返ることなく、振り返れない旅へと。

『隣町のおじさんの所へ』

母さんの遺言の意味を、半分も理解していなかった俺は、とても簡単に成しとげられると思っていた。

そう。ソレが起きるまでは…。

早くおじさんに会わないと。

会って聞かないと。

そのあせりから、迷わず俺は駅へと向かった。

電車で行けば、隣町まで約五分でつく。

サイフの中に眠っていたカードを取り出して改札口を通った。

ホームには俺の他に人が三人。

ひたすらケータイをいじる、女子高生。

新聞に夢中な、サラリーマン。

そして真っ白なロングコートを着た、女の人が一人。

朝のラッシュが過ぎたとはいえ、さみしすぎるホームに俺は違和感を覚えた。

それは電車が到着するちょうど五分前のことだった。

―バンッ―

一発の銃声とともに、ほほから血が流れるのがわかった。

本能的に命の危険を悟った。

急いでホームから逃げる俺と、追いかけるような銃声。

それは住宅街に入ってもやまなかった。

なのに、民家から人が出てくる気配なんて、まるっきりなかった。

それどころか、さつき横を通り抜けた家は、リビングで笑いながらテレビを見ている主婦がいた。

「気づいてない？…聞こえてないのか？」

まるで俺と俺を追ってる人だけが、この世界から隔離されたかのようだ。

「隔離…。」

それを言葉として俺が発した時だった。

銃声がやみ、静かな空気に包まれた。

「助かった…。」

ため息と共に安心感が生まれる。

「それにしても、どういうことなんだ？いきなり銃で撃たれたり、追いかけ回されたり…。」

独り言を言いなれてるせいかな、ついつい声が大きくなってしまった。あわてて口をふさいだけれど、どうやら遅かったらしい。

―パタパタパタ―

無数の足音と、無数の殺気が近づいてくる。

それは、だんだんと多く。

それは、だんだんと大きく。

それは、だんだんと近く。

そして、ついに俺の目の前まで…。

第1章・第5話・第6話

「いたか？」

「いえ、いません。」

「そっちは？」

「こちらダメです。」

「確かに声がしたのだが…。」

目の前で繰り広げられている光景に、俺は目を見はった。俺は目の前にいるのに、その俺を探している。

「チツ！」

舌打ちだけを残し、白いコートを着た集団は去っていった。

「何かよくわからんけど、助かったあ…。」

不安定な安心から、確実な安心になったことがわかった。

『おじさん以外は信じないこと』

母さんの言葉がよみがえる。

自分だけの力で、隣町まで行かないといけない。

俺にはその事実が、とても重たく思えた。

「隣町まで歩くしかないか…。」

電車で行ければ五分なのに、歩けば三十分もかかる。

今の俺には、その三十分でさえ恐怖だった。

けれど、いつまでたっても立ち往生している場合じゃない。

とりあえず、俺はその場から歩き始めた。

いつどこから命をねらわれても、おかしくない。

そね押しつぶされそうな緊張にたえながら、足を進める。

いつのまにか見なれた風景の場所までたどりついた。

そう。俺の家だ。

歩いて三十分の道も、自転車で行れば少しは短くなる。

そう考えた俺は、危険と知りつつも家に戻ってきた。

けれど、そこにはもう何もなかった。

あの大量の瓦礫も、母さんの亡骸も、俺が投げた鍵すらもなかった。当然、自転車もあるわけがない。

「どういうことだよ…。」

俺がココを出てから、何時間もたっていない。

それなのに、何のカケラもなくなっていた。

まるで空地だ…。

あまりの光景に、脳がどう処理していいかわからなくなったみたいだ。

俺の手足は、動くことを忘れていた。

聞きなれた足音が、俺の耳に入るまでは、ずっと…。

「春紀!!」

俺はその声と足音に、安心して振り返った。

「誠人!!」

俺の声の先にいたのは、友達の戸田誠人だった。

俺は誠人にかけてやった。

「お前は俺が見えるんだな？」

俺の言葉に誠人が首をひねる。

「当たり前のことを言うなよ。」

「だよな…。」

なら、さっきのは何だったんだ？

俺の中に疑問が広がる。

『…て…』

また突然に、あの少女の声がした。

誰なんだ？

さっきよりも、とてつもなく深く深い疑問が広がる。

思考回路が集中する。

俺はあの子を知ってる…。

その結論に達したその時だった。

「おい！どうしたんだよ！！」

誠人の声と、肩を捕まれたことに驚いて、我に返った。

「ごめん…。いや、考え事をな…。」

答えるわけには、こいつまで巻き込むわけにはいかなかった。

けれど、そんな俺の思いとは裏腹な答えが、誠人から返ってきた。握られたナイフに、血がしたたっている。

アレは俺の血だ…。

さつき肩に触れられた時に切られていた。

俺の肩から血が流れる。

『おじさん以外は、信じちゃだめ』

母さんの遺言の意味が、ようやく理解できた。

「お前もかよ…。お前も、俺を…。俺の命を狙っているのか。」

悲しみと、深い怒りがこみ上げてくる。

誠人は答えずに、ナイフを俺の方へと向けた。

「…んで、何でなんだよ！！」

困惑する俺をしりめに、誠人は一流れの風になって俺に近付いてきた。

俺も覚悟を決めて、カバンからナイフを取り出した。

第1章・第7話・第8話

手に残っているのは、肉のカンシヨク。

ナイフが裂いた、誠人の腹のカンシヨク。

俺の目の前に、誠人は崩れ落ち、そして息絶えた。

そう。俺が誠人を殺したのだった。

「まさとおおおお!!」

俺は力のかぎり叫んだ。

そして、運命に涙した。

俺の覚悟なんて、無に等しかった。

戦う気だった俺と、わざと切られた誠人…。

俺の中でさらに深くなる疑問。

『お前だけは…逃げきれ…』

誠人は確かにそう言った。

―パチパチ―

―パチパチ―

拍手の音に驚いて振り返る。

振り返った先にいた人物に、俺は目を疑った。

白いコートを着た集団の真ん中で、俺に向けて拍手を送る人影。

「父さん…。」

驚きと、不安がいりまじった声が出た。

「久しぶりだな。春紀。」

まぎれもなく、父さんの声だった。

「父さん…。ホントに?」

父さんが静かにうなづく。

その時だった。

白いコート達が、一斉に銃口を父さんに向けた。

「父さん、逃げ――」

俺の声は間に合わなかった。

銃弾の中で、父さんのいれ物がおどる。
もう、涙は出なかった。
恐怖のあまり、立ちすくむ。
もう、涙は出なかった。
やがて銃声が止み、銃口がこちらをむく。
もう、涙は出なかった。
ナイフを握り直し、白いコート達の所へと走った。
心はもう、泣けなかった。

無数の銃弾が、肌をかすめる。
熱さと痛みが、その度に加速していく。
それでも俺は止まらない。
自分自身を止められなかった。
握っているナイフが、次々と白いコートを赤く染める。
そして、最後の一人にたどりついた。
「たっ助けて…。武器も捨てるし、二度とお前を追わない…。」
そう言つて、白コートは銃をこちら側に放り投げた。
俺はスッと手を伸ばし、銃を拾い上げた。
ためらうことなく、銃口を白コートに向ける。

「おっお願いだ。あつあの人の命令で、俺達は動いていただけなんだ。全てあの人の命令なんだ！だから、たっ助けてくれ！！」
「今さら…。」
白コートは完全に腰を抜かしている。
俺は銃口を向けたまま、白コートの方へと歩いて行った。
「死ねよ。」
冷たい言葉と共に、引き金を引いた。
叫び声を放つて、白コートは肉塊になった。

一瞬の静けさ・・・。

ふと我に返る。

人の山と、大量の血。

一気によみがえる恐怖と悲しみ。

「うわああああああ！！」

心がこわれるかと思った。

全身から力が抜けた俺は、その場にしゃがみこんだ。
血のにおいに包まれながら泣いた。

泣いて、泣いて・・・。

そして、眠るように闇の中へと堕ちていった。

眠っている少年を、男が抱き上げた。

「まさか、こんなに成長してるとは・・・。」

男は少年を抱えたまま、白のワゴン車へと進んで行った。

第2章・第1話・第2話

雫が落ちる。

波紋が広がる。

月明かりがさす暗闇に俺はいた。

「夢・・・か？」

俺がいたのは、小さい頃によく遊んでいた公園だった。

「夢か・・・。」

幼い頃の俺と、女の子が一人。俺とは別にいた。

それを見て、俺は夢だと確信した。

砂場で遊んでいる二人に、俺は静かに近づく。

けれど、歩いてても歩いてても二人のもとには近づけなかった。

俺はあきらめて、その場に座り込んだ。

遠いはずなのに、ちゃんとした音として声がきこえてくる。

「次は春くんの番。」

「じゃあ、電車に乗ろうかな。」

「ダメだよ春くん。駅には白の人がいるから。」

「そつかあ。じゃあ家に帰って、自転車に乗ろう！」

「残念でした。もうお片付けしちゃった。」

心拍数が上がってるのがわかる。

駅・白の人・家・・・次はアイツだ！

「それなら友達を使おう。」

やっぱりか・・・。

俺の思った通りに進んでいく会話。

思い出される悲しみと恐怖。

俺が困惑している間にも、会話はどんどん進んでいく。

「これからどうしよう・・・。」

手札を使い尽くした幼い俺が、ため息まじりに言った。

「これから・・・？」

そうだ！もう悲しんでいる場合じゃない。前を向いて進まないといけない！！

それに、二人の会話が本当に俺の事だとすると・・・。

『あゝあ。体力0（ゼロ）で休みかあ。』

やっぱり今の俺まできた。

このまま聞いていれば、たぶんこの先のことも聞けるはず…。

俺は今よりもっと、二人の会話に神経を集中させた。

『だから…で…しなきゃ。』

『でも…は？僕は…に…ないといけないのに。』

大切な言葉にだけノイズがかかる。

「どういうことだ？今まで、あんなにハッキリ聞こえてたのに…」

それでも俺は、全神経を耳に集中させる。

けれど、ノイズは大きくなるばかりだった。

「だめか…」

俺が諦めかけた、その時だった。

『ねえ春くん。全ての運命が自分の手の中と知った時、人はどうするのかしら…。』

その言葉だけが、ハッキリと聞こえてきた。

俺は何て答えたんだっけ…。

幼い俺の口もとに集中する。

幼い俺の口は、ハッキリとこう言った。

『……』

俺はその答えに愕然とした。

認めたくない気持ちと、認めざるをおえない気持ち。

混乱する俺に、追いつちをかけるように激しい頭痛がおそつ。

そして俺は、さらに深い眠りへとオチティツタ。

第2章・第3話・第4話

次に目が覚めた時にも、暗闇だった。

「また夢?・・・っ!」

肩の痛みで、現実にいることがわかった。

暗いのは、どうも目隠しのせいだった。

幸い手の自由はきく状態だったので、素早く目隠しをとった。

どうやらココは、大型車の最後部座席みたいだ・・・。

車は、今は動いていない。

赤信号? いや、もしかしたら目的地についだのだろうか・・・。

とりあえず俺は、情報を求めて静かに体を起こした。

車の窓からは住宅街が見えた。

それは、俺の記憶にはない町だった。

重たいエンジンの音が聞こえてくる。

どうやらココはまだ、目的地ではないらしい。

それなら、目的地に着いたら俺はどうなる?

答えはきつとこうだ。

『殺される……。そうならないうちに、逃げて……。』

俺の脳裏に、またあの少女の声がした。

俺はその声に静かにうなづいた。

色々考えている時間なんてない。

とにかく脱出方法を探すために、運転席へと目を移した。

「……。うそ……。だろ？」

俺は、その運転手をよく知っていた。

あの髪型も、あの広い背中も……。

全てにおいて、俺はこの人を知っていた。

「父さん……。」

おもわず声のボリュームが大きくなってしまった。

車がゆっくりと止まっていく。

たぶん完全に車が止まれば、俺は殺されるだろう。

不安と恐怖が迫ってくる。

けれど、車が完全に止まったのにもかかわらず、白コートがあらわれる気配すらなかった。

「やっと起きたか。」

それは間違いなく父さんの声だった。

「父さん？ホントに父さん？」

父さんらしき人は振り返ることなく、静かにうなずいた。

「でも、父さんは・・・さっき・・・。」

父さんの死を認めるようで、それ以上は言葉にできなかった。

「さっきのは、父さんじゃない。あの時死んだのは、白コートの仲間だ。」

「でも、白コート達は・・・。俺が全部殺してしまった・・・。けど、父さんはその中にいなかった。」

「父さんは、ずっとお前のそばにいた。」

「でも！確かに父さんは、目の前でうたれた・・・。」

少しの間、沈黙が流れた。

静かに空気が冷えていく中で、先に沈黙をやぶったのは父さんだった。

「お前には、いつか話さないといけなかった……。けれど、幼いお前に現実を押しつけることはできなかった。」

「幼い俺？」

今の俺でなく、何で幼い俺が……。

「ッ!!」

俺は、あの夢を思い出した。

「やっぱりあの子供は、俺自身だったのか……。」

ポツリとつぶやいた俺に、父さんは悲しい声で答えた。

「夢まで見たか……。やっぱりお前が……。」

「何？何なんだよ！教えてくれよ!!」

俺の勢いとは逆に、父さんは静かに首を横に振った。

「父さんからは、言うことができない。ただ一つ言える事は……。お前自身はもう二度と、普通の生活には戻れない。ただそれだけだ……。」

第2章・第5話・第6話

父さんの言葉で、さらに空気が冷えていった。

「なっなんだよそれ。冗談・・・だろ？」

父さんの表情はかわらない。

心の中まで冷えそうになる。

「俺は・・・俺は、どうすればいいんだ？」

父さんは、ただただ首を横に振るだけだった。

「何も、何も言えないんだ・・・。」

そう言った父さんの声は、かすかだけどふるえていた。

俺はうなだれるしかなかった。

「おじさんの所へは、父さんが連れて行ってやる。だから・・・。」

「だから？」

「いや・・・。なんでもない。」

久しぶりに会った父さんとの会話は、そこで終わった。

ゆっくりとエンジンがかかり、車が進みだす。

次々と変わっていく風景。

すべて見たことのない景色ばかり・・・。

きつと遠回りしてるんだ。

理由は・・・。

聞きたいけど、俺は言葉として口に出せなかった。

でも、聞かなくてもわかる気がした。

きつと、白の人がいるから・・・だから普通の道は通れない。

ただ、それだけのことだろう。

俺は、ただ静かに窓の外にだけに心をかたむけた。

一時の休息・・・。

『普通の生活には戻れない・・・』

父さんの言葉が、何度も頭の中で回る。

きつと、そういうことなんだ・・・。

静かな空気のまま、車は山を2つ越えた。

静かな空気のまま、車は村を1つ越えた。

そして・・・。

―星咲村―

幼い頃に見慣れた町。

おじさんが住んでいる、旅の目的地。

車は町の中をどんどん進み、そしておじさんの家の前の田んぼで止まった。

「降りろ春紀。そして、振り返らずに立ち止まらずに、おじさんの家へ行け。」

「父さんは・・・これから父さんは、どうなるんだ?。」

それが最後の会話になった。

俺の言葉に、父さんはただ首を横に振るだけだった。

俺は、静けさの中で車を降りた。

おじさんの家までの真っ直ぐな田んぼ道を進む。

―ピーンポーン―

気持ちとは裏腹な軽やかな音。

インターホンの返答はないまま、扉が重くゆっくりと開いた。

俺はゆっくりと足を前へ運んだ。

―ドッカーン！―

歩いてきた道の後ろで、とてつもなく大きな爆発音がした。

たぶん……。いや、絶対……。……。

「父……。さん……。。」

最後の約束を守ると決めた俺は、振り返らずに泣いた。

父さんとの思い出を、思い出せば出すほど、涙が溢れた。

それは俺の足元に、小さな水溜りをつくった。

雫が落ちる。シズクガオチル……。

俺は覚悟を決めて涙をぬぐった。

小さな水溜りにうつった過去の自分をふみつける。

そして、振り返ることなく扉を閉めた……。

第3章・第1話・第2話

おじさんの家は・・・。

「暗っ!!」

小さい頃に見ていた家の記憶が塗り替えられていく。

薄暗い廊下に、明かりがわりのロウソク。

まるでホラーハウスだ・・・。

「そういえば、どこに行けばいいんだろ・・・。」

狭い廊下の中で、俺の声が反響した。

ふと、脳裏に老人の手が見える。

その手がゆっくりと俺を呼んだ、そのときのことだった。

勝手に動き出す手足・・・。

「なっなんだよ! うわっやっやめろって!!」

必死に自分の力で止めようとしたが、いつこうに止まる気配は無かった。

俺は諦めて手足が行きたいままにさせた。

廊下をいきなり、階段をのぼる。

2階へ、3階へ。

階段をのぼりきると、大きな扉の前に出た。

そこへきて、やっと手足が止まった。

記憶があつてゐるなら、ここは食堂のはず。

扉にとりつけてある金色のノブに手を伸ばす。

—キイイイ—

不気味な音を立てながら、ゆっくりと開く扉。

中から溢れ出てくる光。

そこには廊下とはうってかわつた光景が広がっていた……。

天井から吊るされた、豪華なシャンデリア。

長く白いテーブルに並べられた、美味しそうな食事たち。

同じように並べられているグラスはシャンデリアの光を反射して、さらに輝きを増していた。

「よく来たな……。」

テーブルの一番奥に座っていた老人が、ふいに口を開いた。

姿かたちは老人でも、その声は昔聞いたことのあるおじさんの声だった。

「お久しぶりです。」

俺は部屋の奥へと一礼した。

「まあそんなに硬くならずに……。ほれ、イスにでも座れ。」

その声と同時に、また頭の中で老人が手招きした。

再び勝手に動き出す手足。

一瞬だけは体を強張らせたが、次の瞬間にはもう好きなようにさせた。

白く長いテーブルの横を、どんどん奥へと進んでいく。

ちょうど前から3番目のローソクたてを過ぎたときだった。

目の前にあったイスが自動的に後ろへさがり、そして俺はそれに座らされる。

そこでやっと手足の自由が、完全に戻ったことがわかった。

目の前のグラスにジュースが注がれていく。

注がれていくというより、0（ゼロ）の状態からグラスを満たしていった。

それにはもう、驚くことはなかった。

「さあ、食事でもしながら話をしようか。」

老人の声とともに、居なかつたはずのメイドや執事が現れた。

一斉に席につき食事を始める。

いつの間にか空腹になっていた俺も、思い切って皿に手を伸ばした。

『・・・め・・・。食べちゃ・・・だめ・・・。』

少女の声が脳裏に響いた。

俺はその声に従うように、スツと皿を元の位置へと戻す。

そんな俺をしりめに、皿の中の食事はどんどんなくなっていく。

そして、ソレが起こった・・・。

第3章・第3話・第4話

―バタンッ!―

大きな音を立てて、隣に座っていたメイドが倒れた。

そして、動かなくなった・・・。

そしてまた・・・。

―バタンッ!!バタッバタッ・・・・・・・・―

大勢のメイド達や執事達が倒れていく。

「どっどっとなってるんだ?」

戦慄に震えながら、俺は部屋の奥をにらんだ。

「どうして食べなかった?」

再びおじさんの声がした。

「毒が入ってるものをすすめといて・・・。」

俺はイライラしながら言った。

「そうか・・・。お前は“死”を望まないのか。」

そう言ったおじさんの声とともに、部屋の明かりがおちた。

「今度は何する気だ！」

俺の声は、暗くなった部屋に虚しく響くだけだった。

とつさに俺はカバンから懐中電灯を取り出す。

―カチッ―

小さな音とともに、俺の周りが少しだけ明るくなった。

スツと手を伸ばして、部屋の奥だったであろう所へ光を向けた。

「えっ？」

光が照らした先……。

そこには何もなかった。

俺は闇雲に部屋中を照らしてみた。

けれど、目の前にあったはずの机も料理も、大勢の人々の姿も、どこにもなかった。

大きな孤独感が闇となって俺に迫ってくる。

失望も絶望も、今まで以上に大きくなる。

恐怖で手に力が入らない。

俺の手からスルリと抜け落ちた懐中電灯で、部屋の異変に気づいた。

―ピチャッ―

落ちた懐中電灯は、確かにそんな音を発した。

足元の違和感も明確になってくる。

「水？」

わずかだけど、床が濡れている気がする。

その違和感は床だけでは終わらなかった・・・。

「冷っ！！」

靴の中にほんの少し水がたまっている感じがした。

それも、普通の水以上に冷たくて、粘り気まであった。

俺はそつとその場から一步踏み出そうとした…。

「え？」

俺の足は前に進むどころか、むしろ氷づけにされたように動かない。

その間にもどんどん水位は上がってくる。

「なっ何なんだよこれ…。だんだん増えてくるし。くそっ！動かねえ。」

水のような液体は、もう顔の辺りまできていた。

「止まれっ！」

声を振り絞って叫ぶ。

すると驚いたことに、液体の上昇が止まった。

「驚いた…。もうそこまで力をコントロールできるようになっていたとは…。」

老人の声が部屋に響いた。

「けれど、お前はここで死ぬ方が幸せだろう。」

老人がそう言うと、止まっていたはずの液体の上昇がまた始まった。

口をふさがれ、鼻をふさがれ…。

俺の意識は、暗く深い所へオチテイク。

落ちきる前に一言だけ、老人の声が聞こえた。

「許してくれ。お前には、重すぎるんだ…。」

…。…。…。…。

冷たさの中へ…。

…。
…。
…。
…。

暗い所へ…。

『絶対に死なせない…』

無にかえろつとする俺を、温かさが包みこむ。

俺は安心して眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6242b/>

Dreaming Baby

2010年10月28日06時41分発行